

英語圏におけるヨセフスの近代語訳とその受容史

秦 剛 平

ドイツが誇るヨセフス学者ハインツ・シュレツケンベルクは、一九七七年に、『ヨセフスの受容史と批判的なテクスト研究』^①をブリル社から公刊する。彼はこの書の「受容史」の章立ての中で、ギリシア語で著作した最初の数世紀の教会の物書きたちが、どのような目的でヨセフスの著作を利用したかを論じる。そこで取り上げられているのは、小アジアのサルデイスの主教メリトン（？—一九〇年ころ）からビザンティンのタツダイオス・ペルシオテース（十三世紀）に至るまでの教会の著作家たちである。彼はそれにつづけてラテン語世界でのヨセフスの受容史を語る。そこで取り上げられているのは、カルタゴ出身のテルトリアヌス（二五〇以降—二二〇年ころ）から偽ライネリオ（サツコーニ）（十四世紀）までの教会の著作家たちである。

シュレツケンベルクとは別の方法論でヨセフスの著作の研究史に立ち向かったのはニューヨークのイエシバ大学の教授ルーイス・フェルトマン博士である。彼はロウプ古典文庫のヨセフスの訳者のひとりであり、ヨセフスの研究史に大きな関心を示す。彼は、一九八四年に、一〇五五頁に及ぶ浩瀚な文献集『ヨセフスと現代の学問研究（一九三七—一九八〇年）』^②を公刊する。彼はさらにこの文献集の刊行から二年後に、『ヨセフス——補遺的文献集』^③を刊行する。

フェルトマンは前著の中で「現代語訳への翻訳」の項目を設け、近代語訳のひとつとして一七三七年に公刊され、いまだに広く読まれているウィリアム・ウイストン訳に触れた後、ヨセフスの現代語訳について四頁にわたってコメントする。しかし彼はそこでの項目が「現代語訳への翻訳」であって「近代語訳への翻訳」でないためか、あるいはシュレツケンベルクがその領域をすでに扱っていると考えたためか、一六〇二年のトーマス・ロツジ訳にはじまる英訳「ヨセフス全集」の歴史には詳しくは立ち入らない。

本稿は、ヨセフスの翻訳と受容の歴史を(一)「ウイストン訳以前」、(二)「ウイストン訳」「ヨセフス全集」の登場、そして(三)「ウイストン訳以後」の三つの期間に分け、一六〇二年のロツジ訳から一八四七年のトレイル訳までを紹介する。なおそのさいには、ヨセフスの訳業に見られるキリスト教的反ユダヤ主義に特別の注意を払う。

一 ウイストン訳以前

(一) 最初の英訳者トーマス・ロツジ

ヨセフスの全著作の最初の英訳は、一六〇二年に、劇作家のトーマス・ロツジ(一五五八ころ—一六二五年)によってなされる。書名は非常に長いもので、以後他の諸訳もそれにならうものとなる。なお本稿でヨセフスの著作に言及するときには、『ユダヤ戦記』は『戦記』、『ユダヤ古代誌』は『古代誌』で統一する。

ロツジ訳は英語圏の読者にヨセフスの著作を「キリスト教の歴史と神学のカトリック的理解の擁護」として提供している^①と指摘する研究者がいるが、本書の冒頭の「前置き」に認められる一文「歴史の使用と誤用」の内容は、必ず

しもカトリック的なものではない。⁽⁶⁾

この「前置き」につづくのは「歴史の理解に有益な年代計算」と題する一文で、そこでは天地創造やアダムの誕生を起点とした歴史上で起こったとされる大きな出来事までの期間が数え上げられている。キリスト教側の年代への関心は、ユリウス・アフリカヌス（一六〇ころ―二四〇年）にはじまるが、⁽⁷⁾ ロッジはここでも、カトリック的な関心から年代を記しているのではない。

本全集に見られるヨセフスの著作の配列順序は、『古代誌』↓『自伝』↓『戦記』↓『アピオンへの反論』（以下『反論』と略記）↓『理性の支配』である。ここでの『理性の支配』、すなわち『マツカバイ第四書』（以下『マツカバイ』と略記）はヨセフスの著作ではないが、⁽⁸⁾ ロッジは冒頭の「この歴史書に含まれるすべての書の表題」で、本書に「マツカバイ一族の記念すべき殉教にふれる書」として言及し、エラスムスのラテン語訳からの英訳を挿入する。

H・シュレツケンベルクによれば、このロッジ訳「ヨセフス全集」は、一六〇二年に出版されて以降、一六七〇年まで七度版を重ねる。ちなみに、イギリスの詩人ミルトン（一六〇八―一六七四年）は、このロッジ訳を読んでいるとされるが、⁽⁹⁾ シェイクスピア（一五六四―一六一六年）がロッジ訳を読んでいたかどうかは不明である。

(二) ロッジ訳「ヨセフス全集」の改訳と称するもの（初版、一六七六年）

フランスでは、コロンブスがアメリカ大陸を発見した一四九二年に、ラテン語訳からの近代語訳がなされる。ラテン語からの他の仏訳も、一五三四年、一五六九年、一五七八年にもなされるが、一五七九年にはギリシア語からの仏訳がはじめて出版される。そして一六六七年には、現在でも多くの読者に読まれているアルノー・ダンディリー（一五八七―一六七四年）訳が登場する。この仏訳はダンディリーが八十歳のときに完成させたもので、彼は「ギリシア

語のテキストにもとづいてフラウィウス・ヨセフスを翻訳した最初の人物」、またその翻訳の文体は「荘重で簡潔で、物語の性格に調和している」と評される。この仏訳はロツジの英訳に改訂を迫るものとなる。実際、ロツジ訳の改訳と称するものが一六七六年にロンドンで出版されるが、不思議なことに、改訳者の名前は明記されていない。¹⁹

ロツジ訳の「改訳」におけるヨセフスの著作の配列順序は、『自伝』↓『古代誌』↓『戦記』↓『反論』である。改訳者を称する人物は、ロツジ訳と同様に、『マツカバイ』を本書に収め、その翻訳がいかにギリシア語テキストに忠実であるかを強調し、さらにはロツジ訳には付されていなかったフィロンの『ガイウスへの使節』（以下『使節』と略記）を加えるが、全集に収められた改訳と称する諸書の翻訳は、ロツジ訳のそれとほぼ同じである。この二つを比較する者は、「どこが改訳なのか」と首をかしげることになる。

ヨセフスの著作の受容史研究にとって看過できないのは、この改訳の『戦記』の解説部分に認められる反ユダヤ主義的メッセージである。

改訳者を称する人物は次のように言う。

「もし『ユダヤ人たちの歴史』（『古代誌』）がその著者を最上の歴史家たちの地位へ押し上げるならば、彼（ヨセフス）が『ローマ人にたいするユダヤ人たちの戦争の歴史』（『戦記』）において抜きん出ていることは明らかである。この歴史を傑作とするいくつかの理由がある。主題の壮大さ、祖国の破滅により彼の胸のうちで呼び覚まされた感情、そしてあの血なまぐさい戦争の恐ろしい出来事で彼が担った役割。もし神が、その罪の処罰のために、ご自身の怒りの嵐でそこを征服されなかつたならば、ただひとつの都だけはローマ人の栄光の岩として残つたであろうことを全世界の人びとに明らかにしたこの大包囲攻撃に、他のいかなる主題が匹敵し得るので

あろうか？ 自分自身の民族の律法が足蹴にされるのを目撃したひとりのユダヤ人の、ひとりの祭司の感情にまさる悲しみの感情など他にあるであろうか？……」。

ついで改訳者は、『戦記』全七巻の各巻の内容を略述した後、次のように述べる。

「……あの忘恩の民族の、あの誇り高い都の、あの尊い神殿の破滅よりも大きな（悲劇的な）出来事は（他の歴史に）見られなかったが、そのことが確認されるだろう。確かに、ローマ人たちが世界の覇者であり、しかもこの包囲攻撃がもつとも偉大な君主たちのひとりの仕事だったが、皇帝たちのために有したあの栄光や、勝利者となった民の力、ティトウスの英雄的な勇猛さなどは、もし神が彼らをご自身の正義の遂行者としてお選びにならなかったならば、この企図を引き受けてもかないものとなっていたであろう。流されたご自身の御子の血——あらゆる犯罪の中でもつとも忌まわしい犯罪——こそは、あの不幸な都の破滅の唯一の真因だった。あの悲惨な民族の上に置かれた神の重い御手は、彼らを外部から襲ったこの戦争をこの上なく恐ろしいものにしたが、それはまた内部においても、彼らが原因だった剣と飢えで百万の人びとを滅ぼした、人間というよりは悪魔のような、これらの邪悪なユダヤ人どもの残虐さゆえに、はるかに一段と恐ろしいものだった。そして彼らは残る者たちに、ローマ人たちの軍団に投降することによって自分たちの敵からの安全は別にして、いかなる安全をも期待できぬようにした。神なるお方（キリスト）の死への復讐のかくも恐ろしき結果は、もしそれがほかならぬあの同じ民族のひとりの男——その誕生ゆえに、祭司としてのその資格ゆえに、その徳ゆえに、ヨセフほど敬意を払うに値する者はいない——によって語られなければ、福音の光でもって照らし出される幸せをもたぬ者たちには信じがたいものと映るであろう。ヨタパタの陥落には四十人の者が彼と一緒に洞穴の中に籠もり、誰が最初に殺さ

れるべきかを知るために何度もくじが引かれたが、神はかくも大切な真理を証する彼の証言を利用しようとされて、彼ともうひとりの者が生きたまま残ったとき、神が彼を奇跡によって生かしておかれたことは、わたしには明白であるように思われる。……」。

ここには明確すぎるほど明確なキリスト教的な反ユダヤ主義的メッセージが認められる。そのメッセージは「罪と罰」の応報思想によつてガードされたものである。ユダヤ人たちはキリストを十字架に架けたため——これがユダヤ人が犯した罪である——、彼らの神殿は、紀元後七〇年に、ローマ軍の將軍ティトウスによつて包圍攻撃され破壊された——これが罰である——というわけである。

この応報思想は、後のエウセビオス（二六三ころ—三三九ころ）によつて代表される最初の数世紀の教会の物書きたちの反ユダヤ主義である。ここでのティトウスと彼の率いるローマ軍は、神に成り代わつてユダヤ民族に罰を加える神の器なのである。改訳者はさらに、「イエスの預言」の成就という観点からも議論をつづけ、マタイ第二四章二節、マルコ第一三章二節、ルカ第一九章四四節に見られる「イエスの預言」と称するものを取り上げる。

改訳者によれば、紀元後七〇年の神殿崩壊は、イエスが生前預言したとおりに起こつたものであり、その預言はマタイ、マルコ、ルカの三人の福音書記者が一致して書き留めるものである。「一致」がポイントであることは言うまでもない。

現代の新約学はここで改訳者が引くイエスの言葉をすべて「事後預言」と見なし、ユダヤ戦争を体験するかそれについて情報をもつた福音書記者がイエスの口にこれらの言葉をイエス自身の言葉として挿入したものを見なすが、福音書の学問的な研究や分析などがなされていなかった十七世紀では、福音書のイエスの言葉はすべて彼の真正な言葉

と見なされていたのである。

ここに見られる反ユダヤ主義のメッセージは、以後、ヨセフスの他の近代語訳においても繰り返されるものとなる。ヨセフスの近代語訳の受容史研究で看過できぬ大きな問題である。

(三) ロジャー・レストランジ訳「ヨセフス全集」(初版、一六九二年)

次に登場するのは、ロジャー・レストランジ(二六一六—一七〇四年)訳「ヨセフス全集」である。

レストランジは、そのタイトルページで、「すべては原語のギリシア語に照らして注意深く校訂され校合された」ことを強調する。先行するロツジ訳がラテン語とフランス語からの重訳であっただけに、またロツジ訳の改訳と称するものが実際にはギリシア語テキストにもとづくものでなかっただけに、この強調は重要である。¹³⁾

レストランジ訳におけるヨセフスの著作の配列順序は『古代誌』↓『戦記』↓『自伝』↓『反論』↓『マッカバイ』↓『使節』である。

ヨセフスの受容史研究にとって興味深いのは、本書の冒頭に見られる「購入予定者リスト」である。そこには購入予定者の名前や彼らの職業などが記されている。それによれば、購入予定者の数は四百三十八人、購入予定総セット数は八百三十四セットである。われわれはこのリストに見るヨセフスの著作の購入予定者の多様な職業に驚かされる。¹⁴⁾

このレストランジ訳には故ウィルズ博士執筆の二本の論文が付されている。第一の論文は、ヨセフスの生涯と宗教を論じ、その文脈の中で『古代誌』の第十八巻に見られるかの有名なヨセフスの「キリスト証言」と呼ばれるものを検討する。ウィルズ博士がヨセフスのキリスト証言を取り上げたのは、このころまでに多くの知識人がこの証言をヨセフスのものではないとして退けていたからであろう。博士は証言の真正性を申し立てるために、証言の語句を一つ

ひとつ吟味すると同時に、それがエウセビオス、聖ヒエロニムス、イシドロス、ソゾメノス、ルフィヌス、ソフロニオスをはじめとする古代の多数の教会人によって引用されてきたことや、ヨセフスの写本や、ラテン語訳などの中で保存されてきたことを強調する。多くの教会人によって引用されてきたから、その証言は真性なものだ、それがヨセフスの写本やラテン語訳に見られるから真正なものだ、というわけである。

シュレツケンベルクによれば、この「ヨセフス全集」は、一六九二年に出版されて以降、一七八五年に至るまで、ロンドンばかりか、イギリスの各地でも印刷され、一七七三—一七七五年には海を渡ってアメリカのフィラデルフィアとニューヨークでも出版されている¹⁵。

(四) ロッジ訳「ヨセフス全集」の簡約版（初版、一六九九年）

ロッジ訳「ヨセフス全集」の簡約版は一六九九年にロンドンで出版される。この簡約版の前置きには反ユダヤ主義的メッセージが認められるが、そこでの論旨の展開の大筋は、「ロッジ訳の改訳と称するもの」に見られるものと同じである。

この簡約版の出現をもつて、時代は十八世紀に入るが、われわれはここで、ヨセフスの著作が文学の中に取り込まれた一例としてダニエル・デフォー（一六六一—一七三二年）の『疫病流行記』（現代思想新社、一九六七年）を挙げておく。この作品は、一六五八年から一六六六年ころまでイギリスを繰り返し襲った疫病に苦しめられた国民の惨状を活写したものであるが、その描写の一部に『戦記』の場面が利用されている。

(五) ジャクソン訳「ヨセフス全集」（初版、一七三二年）

十八世紀は「ヨセフス全集」の諸訳がいくつもつくられる世紀である。

その最初のものは一七三二年にロンドンで出版されたH・ジャクソンの手になる『原語のギリシア語から忠実に翻訳されたR・レストランジ卿の翻訳と照合されたフラウウィウス・ヨセフスの真正なる著作の完全集成』である。書名の一部を構成する「原語のギリシア語から忠実に翻訳された」は「R・レストランジ卿」を修飾するのであって、「フラウウィウス・ヨセフスの真正なる著作」を修飾するのではない。この書名は本書がギリシア語テキストにもとづく新訳であるかのような印象を読者に与える¹⁶。

本全集の「購入予定者リスト」によれば、購入予定者は全部で四百九十七人である。そのうち聖職者は二人、ドミニコ会修道士が二十一人もいる。

本全集にはレストランジ訳に見られた故ウィルズ博士の二つの論文が、なぜか別名のH・ジャクソンの論文として付されている。本全集に見られるヨセフスの著作の配列順序は『自伝』↓『古代誌』↓『反論』↓『戦記』↓『マツカバイ』↓『使節』であり、本全集に付された出版社の前置きは、『自伝』を『古代誌』や『戦記』の後に置くのが往時の慣習であったが、著者の生涯を描いたものを最初に置くのが現在の習慣であるので、それに従うと述べている。それはまた、『古代誌』と『戦記』のどちらが先に書かれたのかを批評家は決めかねていると述べている。『古代誌』の「序」の部分に、『戦記』への言及があるだけに、このコメントは不可解である。

(六) J・コート訳「ヨセフス全集」(初版、一七三三年)

J・コート訳「ヨセフス全集」の書名は「ハドソン博士の版にもとづくJ・コートによって原語のギリシア語から翻訳されたフラウウィウス・ヨセフスの著作」である。

コートはロッジ訳が今や古くさいもので、その表現は「非常に潤いのない大仰な」ものであるばかりか、そこには

大きな誤訳が散見されると指摘する。彼はまた、仏訳からなされた訳者未詳の英訳に言及し、「名前の分からぬもう一冊のものが仏訳から（英訳されて）出版された……それはつねにヨセフスの意味を保持しているのではなく、彼の表現方法にはほとんどしたがってはいない」と酷評する。コートは一六九二年のレストランジ訳についてもコメントする。

「……最後はロジャー・レストランジの翻訳である。これは長い間一般の読書人の敬意をわがものにしてきたので、われわれはそれに攻撃を加えたりしてこの版の評判に挑戦したりはしない。しかし、それは非常に高価なものであり、またレストランジ卿の訳文に見られる饒舌は現在ではもはや時代遅れのものである。そこでわれわれは、オックスフォード大学のボドレー図書館の館長ハドソン博士によってフォリオ版の二巻本で出版された、原本の最新で最良の版にもとづく完全な新訳を一般の読書人に提供しようと思う。われわれはそれが、それ自体の価値から、好意的に受け入れられることを願っている」。

コート訳に見るヨセフスの著作の配列順序は、『古代誌』↓『自伝』↓ティベリアスのユストスの『ユダヤの歴代の王の年代記』↓『戦記』↓『反論』↓『マツカバイ』↓『使節』であるが、コートは前置きで、『マツカバイ』の文体が、他のヨセフスの著作とは非常に異なると指摘する。彼はまた、それまでに出版された英訳のヨセフスに触れ、モリソン訳が英訳の第一号であると申し立てる。ここでのコートの証言は、レストランジ訳やジャクソン訳の言及と同様に貴重であるが、モリソン訳がヨセフスの抄訳なのか、それともヨシツポン¹⁷を指すのか、その辺りのことは皆目分らない¹⁸。

二 ウイストン訳「ヨセフス全集」の登場

ヨセフスの著作の翻訳と受容の歴史の上で、一七三七年は重要である。

現在でも広く読まれているウィリアム・ウイストン^①の手になる「ヨセフス全集」がこの年にロンドンで出版されるからである。

ウイストン訳「ヨセフス全集」の書名は『ハヴァアカンプの正確な版にしたがい原語のギリシア語から翻訳された、ユダヤ人歴史家フラウィウス・ヨセフスの真正な著作』である。そこでのヨセフスの著作の配列順序は、『古代誌』↓『自伝』↓『戦記』↓『反論』である。『古代誌』の後には、フォティウスの『ビブリオテカ』から採録された『ディペリアスのユストスの、ユダヤの歴代の王の年代記』が置かれる。すでに見てきたように、コート訳にもヨセフスの宿敵ユストスの著作断片が入れられていたが、ウイストン訳でも同じである。ウイストンは、『反論』の次に『マツカバイ』を彼の全集に入れないのは、それがヨセフス作でないからだとする。正しい指摘である。

われわれは以下で、ウイストン訳のいくつかの特色を見る。

a ウイストン訳に付されたさまざまな論文

ウイストン訳には八本の論文が付されている。そのいずれにも彼のキリスト教的情熱が込められており、現代の読者にとっては、多分、へきへきとさせられる論文である。ここでは第一の論文「イエス・キリスト、洗礼者ヨハネと義人ヤコブに関するヨセフスの証言、立証される」を取り上げる。

ウイストンは冒頭で次のように述べる。

「ナザレのイエスの先触れである洗礼者ヨハネや、ナザレのイエスご自身、ナザレのイエスの兄弟である義人ヤコブらに関して、ユダヤ人の歴史家ヨセフスの中に重要な証言がある。しかし、ナザレのイエスご自身に関する重要な証言は、最近、多くの者によって疑われ、一部の識者によって真正でないとして退けられている。そこでこれらの証言を真正であるとなねに宣言してきたわたしが涉猟した十五世紀までの実際の証言と引用を正しく書き写し、次に読者がより完全な満足を得られるよう、その証言を正しく観察する。しかし、ヨセフスに関する引用を並べる前に、最高の学識をもつ、もつとも有能な判定者であるヨゼフ・スカリゲルの言葉を記しておく。彼はその著書『適正なる校訂について』の「はしがき」一七頁で、『ヨセフスはすべての著作家の中でもつとも賢くかつもつとも真理を愛する人である。ユダヤ人の事柄ばかりか、彼らに関係ない事柄に関しても、われわれは彼がどんなギリシアやラテンの著作家よりも信じるに足ると断言する。これは彼の忠実さと彼の学識の広さが至るところで顕著だからである』と言っている……」。

われわれはこの一文からも、ヨセフスの「キリスト証言」を否定する知識人や読書人がウィストンの時代にも健筆をふるっていたことを知る。実際、すでに十六世紀の終わりには、ドイツのルター派の神学者ルカス・オジアンデル（一五三四—一六〇四年）が、『マルデブルク年代記』の中で「キリスト証言」の信憑性に関して疑念を表明したが、次の世紀の中頃にはT・ルフェーブルも疑念を表明した。それらを皮切りに知識人や読書人たちが次ぎつぎに疑念を表明しはじめるが、その表明はロッジ訳や、その改訂版と称するもの、あるいはレストランジ訳などの近代語訳の出現と無関係ではなかったであろう。イギリス以上に各種の近代語訳が出回ったフランスでも同じであったであろう。思想家ヴォルテール（一六九四—一七七八年）がこの「証言」を断固とした態度で排除したことはよく知られている。²⁰

ウイストンは論文の前半で、二世紀のタキトウスから十五世紀のベネディクト会の修道院長トリミテウスに至るまでの二十五人の著作家が引く「証言」を年代順に並べる。それは彼らが引く「証言」の語句の一致を見るためであるが、その観察から、ウイストンは、「証言」が歴史の中で正しく伝えられてきたと断言する。次いで彼は論文の後半で、ヨセフスはいかなる意味で「彼（こそ）はキリストだった」と述べたのかを説明し、さらにはヨセフスが自分がキリスト教徒であると公言しなかったものの、「モーセの律法を遵守する必要を信じた」ナザレ派かエビオン派のキリスト教徒であった可能性を「ユダヤ人キリスト教徒」の存在から論じる。ここでのエビオン派のキリスト教徒についての情報は、明らかに、エウセビオスの『教会史』からである。^(註)

b ウイストン訳「ヨセフス全集」に見る露骨な反ユダヤ主義

ウイストン訳には膨大な数の註が付されている。その一部は当時のキリスト教的立場、すなわち反ユダヤ主義的立場から書かれたものである。その例のひとつは「戦記」の前置き部分に認められる。ウイストンはヨセフスの一文「実際、わたしには、すべての民族が世界のはじめからこうむった不幸も、ユダヤ人たちのこうむった不幸にはおよばないように見える」の「ユダヤ人たちのこうむった不幸」に次のような註を付ける。「われわれの救い主の殺人者となったユダヤ人たちがこうむったこれらの災禍が世界のはじめ以来の最大級のものとなったことや、われわれの救い主が直接予告していたこと（マタイ第二十四章二節、マルコ第一三章一九節、ルカ第二十一章二節、二四節）、そして事実そのとおりになったことなどに関しては、ヨセフスはもつとも純正な証人である」と。この種のたちの悪い神学的な註が取り除かれるのは、マルゴリウスが一九二一年に出版したウイストン・マルゴリウス訳であるから、ウイストン訳も随分と長い間にわたって反ユダヤ主義の毒を垂れ流しつづけることになる。

c ウイストン訳が勝ち得た高い評価とその展開

ケンブリッジ大学でアイザック・ニュートンの高弟であり、ヨセフスのギリシア語からの訳者でもあるウイストンが、「キリスト証言」の真正性にお墨付きを与えたこともあって、彼の英訳「ヨセフス全集」はヨセフスの文体と感情を見事に捉えた「誤訳箇所などのまったくない」最高の翻訳という評価を得て、欽定訳聖書に等しい地位を獲得する。ウイストン神話の誕生である。

しかしながら、ウイストンが翻訳の底本としたギリシア語テキストは粗悪なテキストであり、そのためその翻訳はさまざまな問題をはらむが、神話が誕生した以上、それを云々する人はいなくなる。

ウイストン訳は、一七三七年以降、イギリスの各地で版を重ねる。ちなみにロンドンでは一七〇〇年代には四たび、一八〇〇年代に入ると二十六たびも印刷されたが、この全集の出版に携わった出版社は十指に上る。²²⁾

すでに見てきたように、アメリカでは「革命戦争」前の一七七三—一七七五年にフィラデルフィアやニューヨークでレストランジ訳がはじめて出版されるが、ウイストン訳「ヨセフス全集」も一七〇〇年代の終わりには新大陸に渡り、各地で印刷される。ウイストン訳のアメリカ版の初版（一七七三年）は第三代大統領となったトーマス・ジェファソン（一七四三—一八二六年）の愛読するものとなる。²³⁾

三 ウィストン訳以後

(一) J・ウィルソン訳「ヨセフス全集」(初版、一七四〇年)

ウィストン訳が大きな成功を収めつつある一七四〇年にロンドンで、ジェームズ・ウィルソン訳「ヨセフス全集」が出版される。

ウィルソンはその前置きで、本全集に解説や論文を付さない理由を「……(本書を早く読みたいという)読者の忍耐力に立ち入ることは不要なことである」にもとめ、さらになぜ「自伝」が全集の冒頭に置かれねばならぬかを説明し、さらにこの新訳を「すべての階層の人びとに広く用いられるようにする」ために出版すると宣言する。

ウィルソン訳は初版で終わり、ウィストン訳の前に完敗する。解説や論文の類を付さずに著作それ自体に語らせるウィルソンの書物哲学に問題があつたのかもしれない。

(二) トンプソン+プライス訳『ヨセフス』(初版、一七七七年)

トンプソンとプライスの両名による英訳『ヨセフス』は一七七七年にロンドンで出版される。本『ヨセフス』は「全体がエベネザー・トンプソン神学博士とウィリアム・チャールス・プライス法学博士によつて原語のギリシア語から新しく訳出された」ものであることを強調し、そればかりか「原語のギリシア語」部分を太文字の斜体文字で強調するが、不思議なことに、ここでは本全集のギリシア語テキストが何であるかや、トンプソン博士とプライス博士の役割分担が何であつたのかは明示されていない。上記の強調の下には罫線が引かれ、その下にはなぜかギリシア語訳聖書(七十人訳)の創世記の冒頭の言葉「最初に神は天地をつくつた」がギリシア文で記されているが、そこでのアク

セント記号や綴りなどにいくつかの誤りが認められる。

本『ヨセフス』の著作の配列順序は、『自伝』↓『古代誌』↓『戦記』↓フィロンの『使節』である。『反論』が欠けており、第二分冊のタイトルページには『マッカバイ』の書名が挙げられているが、実際にはそれは含まれていない。

本書の「購入予定者リスト」によれば、購入予定者の総数は八百三十六人で、そのうち聖職者は四十二人である。

トンブソンとプライスはその前置きで「……われわれの古代の学識ある歴史家の著作を通読すれば、頑迷固陋な不信心者どもが、少なくとも、この世の有罪判決を受けて打ちのめされてこなかった事例を持ち出すことなどできないであろう。……」と述べる。ここで大文字で書き記された「不信心者ども」がユダヤ人を指していることは明白である。

本全集の前置きはその出版の目的のひとつを、ヨセフスの著作が「絶版」になっていることにもとめる。これは、ウイストン訳やレストランジ訳が印刷されつづけているだけに奇妙な理由付けである。前置きはまた、本全集が「ヨセフスの卓越した訳者」である十七世紀のロジャー・レストランジの翻訳に多くを負っていることを認め、レストランジの協力者、オックスフォード大学のボドレー図書館の館長で古典学者でもあったハドソン博士の名前や、レストランジ訳に収められた二つの論文の著者ウィルズ博士の名前を挙げ、レストランジがこの二人に十分な敬意を払ったように、本全集の二人の訳者も、写本などを批判的に研究してきた同時代の研究者たちに敬意を払うが、ウイストン訳への言及はまったく見られない。

(三) C・クラーク訳「ヨセフス全集」(初版、一七八五年)

C・クラーク訳「ヨセフス全集」は一七八五年にロンドンで出版される。訳者のチャールス・クラークはケンブリッジ大学でギリシア語やラテン語、ヘブル語を教えた言語学の教授である。

本全集の「購入者リスト」によれば、購入者総数は三百九十三人で、そのうち聖職者は十七人である。本書の初版におけるヨセフスの著作の配列順序は、『古代誌』↓『反論』↓『戦記』↓『マツカバイ』↓『使節』↓『自伝』であるが、一八一三年版のそれでは『古代誌』↓『反論』↓『戦記』↓『使節』↓『マツカバイ』↓『自伝』に変更されている。クラークは本書の前置きで、『古代誌』が『戦記』よりも先に書かれたのか、それとも後に書かれたのかの問題は未解決であるが、本書で『古代誌』を『戦記』よりも前に置くのは、『古代誌』の方が『戦記』よりも先に書かれたとする一般の見解にしたがうからであると述べる。彼はまた、当時の習慣では著者の生涯を描いたものを最初に置くのは普通であるが、その習慣にしたがわねばならぬ理由はないと述べている。

(四) G・H・メイナード訳「ヨセフス全集」(初版、一七八九年)

メイナード訳「ヨセフス全集」は一七八九年にロンドンで出版されたが、本全集は、シュレツケンベルクも指摘するように、クラーク訳「ヨセフス全集」の拡大版である。メイナード訳におけるヨセフスの著作の配列順序は、『古代誌』↓『戦記』↓『反論』↓『自伝』である。

本全集は十の論文を付している。メイナードは第一の論文「歴史家や、伝記作家、古代の教父のような、教会や他の真正な著作家たちの一致した典拠から明白に立証される、われわれの聖別された主イエス・キリスト、洗礼者ヨハネらに関するフラウイウス・ヨセフスの証言」で、古典学者スカリゲルの言葉「……ヨセフスはすべての著作家の中

でもっとも真理を愛した人間である……」を引いた後、イエスばかりか、洗礼者ヨハネやイエスの兄弟「義人ヤコブ」らについて言及する『古代誌』のヨセフスの「証言」の真正性を示すために、ローマの歴史家タキトゥス（五五―一〇五年以降）をはじめとして、キリスト教側の弁証家ユスティヌス（一〇〇―一六五年）、アレクサンドリアの神学者オリゲネス（一八五―二五四年）や、イタリアの教皇伝作者プラティナ（二四二―一四八一年）、ドイツのベネディクト会修道院長トリテミウス（一四六二―一五二六年）に至る二十七人の物書きたちの言葉を蒐集してそれを紹介する。

メイナードは第二の論文「前述の証拠と引用からの観察」で、ヨセフスの証言にたいする彼自身の観察を披露する。彼はまず、現在の版で見られるイエスや、洗礼者ヨハネ、イエスの兄弟ヤコブに関するヨセフスの「証言」に照らしてみても、それらは真正なものであり、その文体は紛れもなくヨセフスのものであると断言する一方、もしヨハネやヤコブに関するヨセフスの証言が真正なものであれば、同じ著作家がキリストについて語らないことなどありえようかと畳み込む。彼は次に、「キリスト証言」に見られる「彼（こそ）はキリストだったのである」を観察して、このような発言をすることができたのは、ヨセフス自身が「ナザレのイエスを真のメシアであると信じたユダヤ人ナザレ派かエビオン派であったからだ」と申し立てる。彼によれば、このユダヤ人キリスト教徒は、イエス・キリストの使徒たちの信仰とは異なり、イエスをメシアとするが、イエスを人間以上のものとは見なさず、またモーセの儀式的律法の遵守の必要を信じたそうであるが、エビオン派についてのこの見解の出所は、間違いなく、エウセビオスの『教会史』である。

一般の人びとが単純に抱くユダヤ史への疑問は、なぜイエスをキリストとして受け入れない「呪われた民」がいま

だ歴史の上から抹殺されず、その存続が許されているのか、彼らの存続には神の摂理的な意味があるのか、というものであつたであらう。実際、イギリスにおいても、ユダヤ人たちは追放の憂き目に遭うが、抹殺はされていない。そこでメイナードは、第七の論文「フラウイウス・ヨセフス時代以降の一七〇〇年以上にわたるユダヤ人の歴史の継続——ヨーロッパ、アジア、アフリカ、そしてアメリカの各地に散つた彼らの離散や、現在の知られている世界で彼らを受けたさまざまな迫害、行動、現下の状態などの記述を含む」で、この疑問に答えようとする。ここでの彼は、テオドシウス帝治下のシナゴグの焼き討ち、ユダヤ人に不利なユステイニアヌス帝の勅令、十字軍による迫害、カステイリヤの王ヘンリー三世による迫害、教皇イノセント二世による保護、異端審問での迫害、ヘンリー三世による重税とエドワード王によるイングランドからの追放、ドイツでの迫害、教皇ピウス四世の発行したユダヤ人に不利な勅令とピウス五世による追放、ポヘミア、ハンガリー、モラヴィア、ハンブルク、オランダにおけるユダヤ人の受け入れ、東インド諸島やトルコでの現状などに触れ、その災禍の中で生き延びてきたユダヤ人に言及する。

メイナードは、ユダヤ人の運命について、一方で「ユダヤ人どもが福音書を頑なに拒否して神の民でなくなつて来、神が顕現して彼らのために働かれることはまったくない。彼らは、その背信の罰として、過去長い期間にわたつて、この世の庇護者や精神的な庇護者なしに全世界に散らされてきた。彼らはその住むすべての地で軽蔑され、すべての王国の人びとの愚弄と嘲笑の対象とされている」と述べると同時に、他方で、「ユダヤ人どもは、かくも多くの手段が彼らに罪の意識を自覚させるために講じられた後でも、依然として背信を続けている。それゆえ彼らは徹頭徹尾非難されねばならぬ。それは当然である。とはいえ、われわれには、あらゆる時代に、知識や慈悲心にまさる熱意でそうしてきたキリスト教徒たちにならない彼らを追放したり、虐待したり、危害を加えたり、苦しめたりすることが許

されているわけではない。慈悲心は信仰に勝る。そしてもしわれわれが残酷でなく慈悲心があれば、われわれは彼らの頑迷固陋な信仰に勝る」とも述べる。われわれはここにアウグステイヌスが『神の国』で披瀝したタチの悪いユダヤ人観を見るであろう。

本全集の巻末に付された「購入者リスト」によれば、本全集を購入した聖職者は二十二人、ミスターの敬称が付けられた者八百六十人、ミセスの敬称が付けられた者六十七人、エスクワイアの敬称が付けられた者四十人、貴族の爵位のある者二人、ミスの敬称の付けられた者十人、'Lieutenant' や 'Captain' Major の敬称が付けられた者十三人、医師六人、伯爵夫人三人である。

(五) トーマス・ブラードシャウ訳「ヨセフス」(初版、一七九二年)

メイナード訳「ヨセフス全集」が出版されてから四年後の一七九二年にロンドンで、トーマス・ブラードシャウ訳「ヨセフス」が出版される。このブラードシャウ訳は『自伝』と『反論』を欠き、『古代誌』につづく『戦記』のあとに、『マツカバイ』がヨセフスの著作のひとつとして、またフィロンの『使節』が入れられている。そしてこれらの著作の後に、「われらの神性なるイエス・キリスト、洗礼者ヨハネ、義人ヤコブに関するヨセフスの証言」を擁護する一文や、「イエス・キリストに関する前述の証言にもとづく発言と観察」と題する一文がつづく。

ブラードシャウ訳には、メイナードの「ヨセフス全集」と同じく、「ヨセフスの時代から現代までの、幾世紀にもわたって継続してきたユダヤ民族の歴史」が付されており、その記述の結論部分では、ヨセフス以後の歴史においてユダヤ民族がこうむった災禍はキリストを信じない彼らの信仰が原因だったことや、不従順には神の罰が伴うことが強調されるが、そこまでの歴史記述ではメイナードの記述と重なるところが非常に多い。同じ重複的な記述は、彼の

「その名前がフラウィウス・ヨセフスの著作において現れる主要な預言者たちの予告」や、「地名索引——フラウィウス・ヨセフスの著作において言及された主要な地名についての記述」、「フラウィウス・ヨセフスの著作の中で語られた主要な登場人物と出来事の総索引」にも認められる。これらは明らかにメイナードの「その名前がフラウィウス・ヨセフスの著作において現れる主要な預言者たちの予告の実例」や、「フラウィウス・ヨセフスの著作において言及された主要な場所の、地名および記述内容の索引」、「フラウィウス・ヨセフスの著作の中で語られた主要な登場人物と出来事の総索引」からのものである。最後のものは表題まで同じである。

本全集の巻末には「購入者リスト」が付され、購入者の名前がABC順に、そしてその職業や購入部数も記されている。それによれば、購入予定者の総数は四百十六人で、うち聖職者はわずか五人である。ヨセフスの著作が一般市民の間で愛読されていることが示される。

(六) ロバート・トレイル訳『ヨセフス』(初版、一八四七—五一年)

アイルランドの牧師ロバート・トレイルは、ウィストン訳を批判した最初の人物である。彼は『戦記』と『自伝』の新訳を提供する。この二つの新訳は、トレイルの死後の一八四七—五一年に、アイザック・テイラーによって編集されてロンドンで出版される。

本書の冒頭には「訳者前置き」と「編者前置き」が付されている。そのどちらも先行するヨセフスの翻訳、なかでもウィストン訳への痛烈な批判を含み、本書の存在理由を強烈に主張する。

トレイルは前置きのはじめ部分で、彼の新訳が正確で、ウィストン訳よりも「達意で読みやすい」ものになっていることを願うと同時に、ウィストン訳には「無数の箇所」欠陥があり、「文学作品としては、分かりにくく敬遠した

くなる」代物だと酷評する。これはウイストン訳「ヨセフス全集」を「ヨセフスの欽定語訳」としたウイストン神話への最初の公然たる挑戦である。

トレイルはこの前置きの他の箇所でもウイストン訳の欠陥を意識した皮肉を投げつけている。トレイルによれば、ヨセフスの著作のもつ価値や、聖書と関連する主題への彼の証言の重要性を鑑みれば、その翻訳は「正確で、明確で、達意な」ものでなければならず、そのような高度の質を備えた翻訳が出現すれば、本棚の一角を占めるヨセフスの著作は、必要なときにだけ参照されるだけのものではなく、「すべての知識人」の手に常時置かれるものになると述べる。

トレイルは「ヨセフス全集」を完成させる前に亡くなる。一八四六年の終わりから翌年にかけてアイルランドを襲い、その人口の三分の一を奪った飢饉と疫病の犠牲者になるからである。ヨセフスの最初の英訳者トーマス・ロツジも一六二五年に同じ悲劇に遭ったことを覚えておこう。

編者のテイラーは、その前置きで、「この機会に、亡くなった友人の記憶に紙幅をさかねば、それは犯罪的な省略となろう」と述べて、トレイルの生涯に触れる。テイラーによれば、トレイルがヨセフスの著作の翻訳を決心したのは、彼がスカルの町の教区長になって間もなくのことである。トレイルは、最初、立ち向かう仕事の大きさや困難を意識せず、ヨセフスの著作が聖書の歴史に関連するがゆえに、闘志をかき立てられたそうである。テイラーはまた、トレイルが友人たちの批判や助言に耳を貸す人物で、そのためその批判や助言にしたがい、翻訳を何度も推敲し、原文のギリシア語に少しでも近づけると同時に、英語としても読みやすいものにしたと考えている。トレイルの性格についてのこの描写は、ウイストンの偏狭な性格と対照させる意図があるように思われる。

二つの前置きにつづくのは、「ヨセフスの性格と信憑性について」と題するトレイルのエッセイである。彼はヨセフスを近代の歴史科学の精神をもって新たに英文学のジャンルに加えることを望むが、エッセイの冒頭部分は、彼の時代の精神がそれまでの懐疑主義のものとは違うことを示して興味深い。彼は次のように言う。

「ヨセフスの歴史的な権威や信頼性、そして彼の個人的評判は、いつの時代でも激烈な論争の主題となってきた。実際、これほどこっぴどく攻撃され、これほど溺愛的に弁護されてきた古代の著作家の名前を他に挙げることはできない。……しかし今日では、ヨセフスによく通じている著作家であれば、議論の宗教的側面が取り上げられても、キリスト教信仰の擁護者たちに課せられていると見なされた仕方では、このユダヤ人歴史家を弁護したり、彼の証言の正しさを保証したりすることなどを考えたりはしないであろうし、他方、彼の評判を節度をもって攻撃するのであれば、その者は、彼を貶めるために前の時代になされた漠とした一方的な告発を繰り返す愚は犯さないであろう。いや、実際、そのような告発をつづけるために無用のトラブルを引き起こしたりはしないであろう。現代の顕著な特色である過去へのあの反動、現在を他と分かつ歴史の上のいくつかの時期との関わりにおける、あの真摯な知的好奇心……純正な学問的な態度——健全で批判的な精神——と、迷信と偏見の束縛から自由をもたらしした」。

シュレツケンベルクによれば、本書は一八六二年と一八六七年に版を重ねる⁽²⁸⁾。一八六七年版は『戦記』と『自伝』が合本されて一冊本とされている。

ウィストン訳はトレイル訳の出現で葬り去られるのではない。そうされなかった最大の理由のひとつは、トレイル訳がヨセフスの著作の全訳ではなかったことによるものであるが、ひとつはその註が専門的すぎたことによるもの

であらう。

四 結びに代えて

十七世紀の初頭にはじまる英語圏でのヨセフスの翻訳史は、一六〇二年のロツジ訳「ヨセフス全集」の刊行にはじまり、その改訳と称する翻訳、レストランジ訳、ロツジ訳の簡約版、ジャクソン訳、コート訳がつづき、そして一七三七年には、現代でも依然として広く一般読者に読まれているウイストン訳が登場するが、それ以降もウィルソン訳、トンブソンとプライスの共訳、クラーク訳、メイナード訳、ブラードシャウ訳がつづき、そして一八四七年にはトレイル訳の登場を見る。

われわれがこれらの「ヨセフス全集」の諸訳の登場で知ったことは、以下のことである。すなわち、

- (一) ヨセフスの著作の最初の近代語訳であるロツジ訳はラテン語からの重訳であった。
- (二) 「ヨセフス全集」の仏訳史では一六六七年にギリシア語テキストにもとづくダンディリー訳が登場したが、その影響下にあつてロツジ訳「ヨセフス全集」の改訳と称するものが登場した。
- (三) ギリシア語テキストにもとづく最初の「ヨセフス全集」の翻訳はレストランジ訳である。以後、ジャクソン訳やコート訳は、その翻訳がギリシア語テキストからの翻訳であることを強調する。
- (四) ウイストン訳「ヨセフス全集」にはウイストン自身が著した八本の論文が付されている。そのうちの一本はヨセフスの「キリスト証言」の真正性にお墨付きを与える。ウイストンがニュートンの弟子であつたこともあつて、彼の

英訳「ヨセフス全集」は誤訳のまったくない最高の翻訳という評価を勝ち得る。

(五) ウィストン訳の出現以降も、原語のギリシア語からの翻訳を強調する「ヨセフス全集」が出版される。ウィストンの訳業を批判するトレイル訳が出現するのは一八四七年である。

(六) 「ヨセフス全集」に含まれるヨセフスの著作の配列順序はさまざまであつた。全集の中に、ヨセフスの本来の著作でない『理性の支配』、すなわち『マツカバイ』が含まれることがあつた。

(七) 「ヨセフス全集」に付された解説や註に認められる反ユダヤ主義的な言辭はロツジ訳の「改訳と称するもの」にはじまるが、それは福音書に見られるエルサレムの神殿陥落に関する「イエスの預言」と結びつけられたものである。ウィストンも反ユダヤ主義的言辭を弄する。メイナード訳は、ヨセフス以降のユダヤ人の歴史をも補遺として付け、なぜ彼らユダヤ人が現代まで生きながらえてきたかを説明する。そこにはアウグスティヌスのユダヤ人観が認められる。

(八) 「ヨセフス全集」の読者は聖職者に限定されるのではなくて、さまざまな階層の人びとであつた。彼らは「ヨセフス全集」を読むことで、聖書の世界を知つたようである。

今日でも英語圏で依然として広く読まれているのはウィストン訳「ヨセフス全集」である。そこでの反ユダヤ主義的な言説や学問的な検証に耐えられない註は取り除かれ、その訳文もまたずいぶんと改められている。B・ニーゼやA・ナーバーの校訂によるギリシア語テキストが利用できるようになつたからである。ウィストン訳をめぐる現状がよりよいものに改善されたのは確かであるとはいえ、ウィストン訳のはたしてきた功罪は問われねばならないであらう。

(ロッセヌス全集の初版の収集(一部)では、科学研究費補助金(基盤研究C)の援助を受けた「課題番号(21520070)」)

註

- (1) Heinz Schreckenberg, *Rezeptionsgeschichtliche und Textkritische Untersuchungen zu Flavius Josephus* (Leiden: E. J. Brill, 1977).
- (2) I. H. Feldman, *Josephus and Modern Scholarship* (1937-1980) (Berlin・New York: Walter de Gruyter, 1984).
- (3) I. H. Feldman, *Josephus: A Supplementary Bibliography* (New York and London: Garland Publishing Inc., 1986).
- (4) 『題名』 *THE FAMOUS AND MEMORABLE WORKS OF JOSEPHUS, A MAN OF MUCH HONOR AND LEARNING AMONG THE JEWS. Faithfully translated out of the Latin, and French, by Tho. Lodge, Doctor in Physick* 以下(英語のロッセヌス表記(註#4))。
- (5) Erin E. Kelly, "Jewish History, Catholic Argument: Thomas Lodge's Works of Josephus as a Catholic Text", in *Sixteenth Century Journal* XXXIV/4 (2003).
- (6) ロッセヌスの題名註を施したものは、彼がカトリック的な視点から翻訳を行ったという議論の根拠は、チャールス・ホワードへの献呈の言葉とこの読者への「前置き」にないが、その二つはどきまも取り立ててカトリック的というものではない。
- (7) 最初の数世紀の教会の物書きに見られる年代への関心は、秦剛平・H・W・アトリック編『キリスト教の正統と異端』(エッセイオス研究②)リットン、一九九二年所収のウィリアム・アブラーの論文「エッセイオスの『年代記』とその遺産」参照。なおまた、岡崎勝世著『聖書vs世界史—キリスト教的歴史観とは何か』(講談社現代新書、一九九六年)をも参照。
- (8) Heinz Schreckenberg, *Bibliographie zu Flavius Josephus* (Leiden: E. J. Brill, 1968) 21. 以下、Erin E. Kelly の前掲論文は、ロッセヌスの大題「キリスト版」十七世紀の二十回版を重ねたことによる。
- (9) L. H. Feldman + Gohhei Hata 編『ロッセヌスとキリスト教』(山本書店、一九八五年)所収の斉藤和明の論文「ミン・アンとロッセヌス」参照。
- (10) H. Schreckenberg, *Bibliographie zu Flavius Josephus*, 26.
- (11) Erin E. Kelly の前掲論文は、ロッセヌスは二六七(二六七五)年以降、訳者としてのロッセヌの名前がタイトル頁

から外されていることを正しくも指摘する。

(12) レストランジはその前置きで、原語のギリシア語テキストには破損 (Corruptions) が見られることを指摘すると同時に、オックスフォード大学のボドレー図書館の館長ハドソン博士の名前を挙げて、感謝の気持ちを表明している。ここで言及されているハドソン博士は、ツキディデスや、ハリカルナッソスのディオニュシオスのテキストを研究したばかりか、ヨセフスのテキストを校訂したことで知られるジョン・ハドソン (一六六二—一七一九年) である。彼は一七一九年に亡くなるが、そのときにはほとんど完成していたと言われるヨセフスのテキストは、アンソニー・

ホルルの尽力により、翌年の一七二〇年に二巻のフォリオ版で出版されていた。レストランジの前置きによれば、博士はラテン語訳をギリシア語テキストと照合してその翻訳を校訂したりする作業や、ギリシア語テキストと並記されたラテン語訳の下に置かれた註記をつくる作業、印刷所から次ぎつぎに送られてくる原稿の校正などの作業に従事している。

(13) ヨセフスの著作の購入予定者は、不動産業者 (三十九人)、著述業 (十三人)、大工などの職人 (十人)、ビール製造業者 (七人)、織物業者 (七人)、金属細工人 (七人)、靴屋 (六人)、製革業者 (五人)、ワイン卸商人 (五人)、雜貨屋店主 (五人)、石工 (五人)、皮革業者 (四人)、居酒屋の主人 (四

人)、運送業者 (四人)、製粉業者 (三人)、醸造者 (三人)、校長 (三人)、町役場の職員 (三人)、医師 (二人)、ガラス職人 (二人)、刃物業者 (二人)、床屋 (二人)、コルセット製造職人 (二人)、活字職人 (二人)、仕立屋 (二人)、銅板彫り職人 (二人)、樽製造業者 (一人)、店主 (二人)、農業従事者 (一人)、土地管財人 (一人)、馬小屋の管理人 (一人)、鞍つくり職人 (一人)、船舶保有者 (一人)、たばこ販売業者 (一人)、食肉解体業者 (一人)、パン製造業者 (一人)、大工 (一人)、爵位のない地主 (一人)、船乗り (一人)、同業組合の長 (二人)、銅細工師 (一人)、税務局執行官 (一人) である。

(14) 『古代誌』一八・六三—六四に見られる「ヨセフスのキリスト証言」とされる一文は次のとおり。「さてこのころ、イエーサースという賢人——実際に、彼を人と呼ぶことが許されるならば——があらわれた。彼は奇跡を行う者であり、また、喜んで真理を受け入れる人たちの教師でもあった。そして、多くのユダヤ人と少なからざるギリシア人とを帰依させた。彼 (こそ) はキリストスだったのである。ピラトスは、彼がわれわれの指導者たちによって告発されると、十字架刑の判決を下したが、最初に (彼を) 愛するようになった者たちは、彼を見捨てようとはしなかった。(すると) 彼は三日目に復活して、彼らの中にその姿を見せた。すでに神の予言者たちは、これらのことや、さらに、

彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語っていたが、それが実現したのである。なお、彼の名にちなんでクリステイアノイと呼ばれる族は、その後現在に至るまで、連綿として残っている」。

(15) Schreckenberg, *ibid.*, 29.

(16) 一七三六年版の書名はさらに紛らわしい「原語のギリシア語から忠実に翻訳されたヨセフスの著作の完全集成」である。

(17) ヨシッポンについては、D・フルツサル「ヨセフスの著作とされた『ヨシッポン』」(秦剛平十L・H・フェルトマン共編『ヨセフスとキリスト教』「山本書店、一九八五年」所収)二九九―三一六頁参照。

(18) このモリソン訳については、Feldman, *ibid.*, 61参照。

(19) ウィリアム・ウイストンは、一六六七年に、イギリス中部のレスタシャーで、聖職者ジョシュア・ウイストンの子として生まれる。彼は一六八六年に給費生としてケンブリッジ大学のクレアホールに学び、十年後の一六九六年には、『大地についての新理論』を出版し、アイザック・ニュートンに献呈する。これは創世記の洪水物語などが歴史に根拠をもつ記述であることを彗星の衝突から学問的に論証したと主張するもので、それはロックに高く評価されたばかりか、大陸のドイツでも熱烈に歓迎される。ウイストンは一七〇一年にケンブリッジ大学でニュートンの代行教授と

なり、その二年後の一七〇三年には彼の後継者として数学と自然哲学を担当し、ニュートンの理論を広めるのに貢献する。ウイストンは、この間、神学にも興味をもち、一七〇八年には、(ヒッポリュトスの)『使徒憲章』が新約聖書の正典文書の中でもっとも神聖なものであり、三位一体の教義を誤りとする論文を発表する。これはキリストの神性を否定し、「三一神論」成立の契機となった四世紀のアリウスの見解にウイストンが共鳴するようになったことを示すもので(ケンブリッジ大学はこの論文の出版を認めなかった)、彼がアリウス主義者になったという噂がたちまち広がる(彼自身はエウセビオス主義者を称していた)。そのため彼は、異端のレッテルを貼られ、ケンブリッジで国教会の教義に反するものを教えることを禁じた大学の「第四五条項」(4th statute)を破った者として、一七一〇年十一月三十日に教授職を剝奪された上で大学を追われる。四十三歳のときである。ケンブリッジからの追放はウイストンの人生の転機となる。妻と四人の子を連れてロンドンに移り住んだ彼は、科学についての講演をしたり、貴族の子弟たちに数学を教えたりして生計をはかりつつ、キリスト教にのめり込む。彼は、一七一一年―一七二一年に、古代の「使徒憲章」とアリウス派の教えを擁護する五巻本の『原始キリスト教再興』を公刊する。すると今度は、その内容が国教会の「聖職者評議会」で問題にされ訴えられる。幸い、

その訴えは一七一四年のアン女王の死で取り下げられるが、彼は自分が訴えられるに至った経緯を文書にして三度発表する。どこまでも信念の人だったのである。しかし、彼の立場に同情する友人たちは少なかつたと言われる。

ウィストンがヨセフスの翻訳に打ち込んだのはいつか。彼はその「ヨセフス全集」の第二巻で、その翻訳に取り組んだのは一七三四年十二月九日(六十七歳)で、それを完成させたのは一七三六年一月六日(七十歳のはじめ)であると記す。本全集はわずか二年あまりで完成されたことになる。驚くべき早さである。なお彼は、第二巻の末で、一七三四年の時点で六十二冊を数える自分の「著作目録」を掲げている。

(20) ヴォルテールは次のように言う。「フラウィウス・ヨセフスの歴史書にあの有名なイエス・キリストに言及する一文、真の学者すべてが真正でないと判断した一文を挿入した者たちのイカサマを正当化する試みに終止符を打とう。もしあの出来の悪い一文に、彼(こそ)はキリストであった、という言葉しか含まれていないとしても、それだけでそれは常識のある者の目にはイカサマな行爲だと刻印するに十分ではないか。あれほど祖国と宗教に執着していたヨセフスが、イエスをキリストと見なしたなら、それこそ滑稽千万な話ではないか。友よ、もし君がキリストを信じるなら、君はキリスト教徒になるだろうし、もし君が神の子

キリスト、神自身を信じるなら、キリストについて語るの
にどうしてあの四文字だけで片づけることができるだろう
か(彼(こそ)はキリストだった)は四文字で記されている」(ヘルジャー氏への理性的な助言。年代不詳)。

(21) エピオン派のキリスト教徒については、エウセビオス「教会史」(拙訳、講談社学術文庫 三・二七・二、三・二七・六、五・八・一〇、六・一七・一を参照)。

(22) Schreckenberg, *ibid.*, 42-46.
(23) シェファーンソンの読んだヨセフス全集については、
Abraham J. Karp, *From the Ends of the Earth: Judaic Treasures of the Library of Congress*, (DC: Library of Congress, 1991)参照。

(24) Schreckenberg, *ibid.*, 58.

(25) 洗礼者ヨハネの記事は『古代誌』一八・二一六―二一九
参照。

(26) 義人ヤコブについての記事は『古代誌』二〇・二〇〇参
照。

(27) エウセビオスが言及するエピオン派については、前註参
照。

(28) Schreckenberg, *ibid.*, 71.

(29) ヨセフスの校訂本は、拙著『ヨセフス』(ちくま学芸文庫、
二〇〇〇年)二六六頁以下参照。